大学創立40周年を祝う

経済経営学会会長　徐（ソ）　龍（ヨン）　達（ダル）

このたび桃山学院大学の創立，すなわち桃大経済学部創設40周年を迎え，ここに『桃山学院大学経済経営論集』の記念号を刊行できることは，まことに慶祝のいたりであります。

1959年４月，経済学部だけの単科大学として発足した本学は，その後，社会学部，経営学部，および文学部が増設され，また大学院も逐次スタートするなど，ほぼ順調な発展を遂げたものといえます。さらに，数年内に予定されている法律系学部が設置されますれば，長年の懸案であった文科系総合大学としての体制を整えることになりましょう。

大学創設を機会に発足した桃大経済学会は，『桃山学院大学経済学論集』を通じて教員の研究と教育に大きく寄与してまいりましたが，経営学部の増設にともない学会は経済経営学会となり，1973年から現在の誌名『桃山学院大学経済経営論集』に変更されました。大学の発展にとって研究と教育が重要な意味をもつことは多言を要しませんが，それを支える財政の確立もまた，私学にとって肝要であります。

かつて「全共闘」運動の広がりをもたらした中教審答申，大学管理法案，学園の民主化などは，本学における学費値上げ反対運動とあいまって桃大にも「封鎖」をもたらしました。それまで主として学生会員（入学時会費徴収）によって財政が保証され，自主機関として運営されていた学会は，たび重なる学費値上げのため，学生会費の別途徴収が困難となりました。1974年８月以降の学会誌は，学会に編集権を残し，印刷・発行などの事務は総合研究所へ移管されました。その後も経済・経営関係教員の研究と教育の橋頭堡とし

て，この論集が脈々と継承されましたことは当時の学会長としても感慨無量であります。

いまや新しい2000年を迎えて，日本の社会においては産業構造の転換，グローバリゼーションにともなう企業経営の再構築，国際会計基準の導入などの課題が山積しています。桃山学院大学創立40周年にあたり，私は，21世紀の日本の経済・経営のあるべき姿を展望しうるようなすばらしい論稿が本誌を飾り，学問研究の停滞を排する建設的な批判が本誌上で展開され，研究上の緊張感がみなぎる桃山学院大学になるよう祈っております。それは，大学が真の自治に目覚めて国際競争力を高め，知の創造をはかるために必要なことだからであります。

かさねて大学創立40周年を心からお祝い申しあげます。